

2月第4週の礼拝説教

■日 時：2023年2月26日（日）10：30－11：30 降誕節第9主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「ただ主に仕え」

■聖 書：ルカによる福音書4章1～13節（新約p107）

■讃美歌：83「聖なるかな、聖なるかな、」300「十字架のもとに われは逃れ、」

本日は、週報にもありますように、「受難節第一主日」です。この決め方については、今年のイースターがいつかということをはっきりと明らかにした上で、カレンダーを遡って決められています。今年は、3月21日が春分の日ですから、その後の最初の満月から数えて最初の日曜日である4月9日がイースターということになります。そのイースターから主の日である日曜日を除いて40日間遡ると、先週の2月22日となり、今年の受難節の初めの日である「灰の水曜日」になります。受難節を「レント」「四旬節」などと呼ぶこともあります。「レント」というのは、もともとは「春」という意味のゲルマン語で、英語圏では春を待ち望むという意味があったようです。また「四旬節」というのは「40日間」という意味で、本日の聖書箇所などに記されている主イエスの受けられた40日間の悪魔からの誘惑の出来事に由来している、とも言われています。ですから、4世紀ごろからキリスト教会は四旬節の第一主日にはこの箇所を取り上げ、主イエスの受けられた誘惑とその対応を自分自身のこととして受け止め、主イエス・キリストの受難と復活に思いを深くする期間として重んじて来たのです。私たちもまた、今年の受難節はその意味をよく理解して、イースターに向かって、また喜びの春に向かって、新しい歩みを始めたいと思います。

ルカによる福音書4章1節にまいります。「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒野の中を“霊”によって引き回され、」と記されています。この箇所は、前の段落の3章21節から22節の主イエスが洗礼を受けられた出来事に続いています。「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた」と記されています。鳩のように目に見える姿で主イエスの上に降ってきた聖霊は、4章1節では「イエスは聖霊に満ちて」という形で引き継がれているのです。「聖霊」とは、一般には目に見えない神の力・働きを示しています。しかし、これらの箇所では、目に見える形で、主イエスのこれからの歩み全体を導く神の力として描いているのです。その最初が、この「荒野の誘惑」と呼ばれる出来事なのです。聖書の中では、「悪」とは神から離れることであると

考えられています。その際に、人間を神から引き離そうと働く力が人格化されて「悪魔」と呼ばれるようになったとされています。本日の箇所は3節と9節で、悪魔は主イエスに向かって「神の子なら」と言っています。主イエスの洗礼の時に天から聞こえた「あなたはわたしの愛する子」という声の本当の意味がこの誘惑の出来事の中で具体的に明らかになっていきます。1節後半に「**荒れ野の中を、“霊”によって引き回され**」た、と記されています。この“霊”は、主イエスに満ちた聖霊、神様の霊と考えられています。聖霊を受け、聖霊に満たされた主イエスが、その聖霊に導かれて、荒れ野で40日を過ごされたのです。悪魔はそのような主イエスを誘惑し、神の子としての働きを挫折させようと働きかけました。しかし、それも実は聖霊の導きの中で起ったことなのであって、主イエスは聖霊に満たされてその誘惑と戦い打ち勝たれたことを、ルカによる福音書4章1節では宣言しているのです。

2節に、「**四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。**」と記されています。聖書の中で「40」という数は、**苦しみや試練を表す象徴的な数字**です。旧約聖書の中での重要な出来事と言えば、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放され、約束の地に入るまでの「**40年間の荒れ野の旅**」があげられます。その40年間、主なる神は「御自分の宝の民」として養い導き続けたことが、旧約聖書の申命記に記されています。そのことと関連付けて主イエスの荒れ野の40日間の出来事を読んでみると、主イエスの悪魔への答えが申命記の引用でなされていることの深い意味が伝わってきます。4節に記されている主イエスの有名な答え「**人はパンだけで生きるものではない**」は申命記8章3節の引用です。荒れ野の旅の途中、イスラエルの民に天からの食物「マナ」が与えられたのは、人が主の口から出るすべての言葉によって、つまり神によって生きるものであることを教えるためであった、というのです。私はこの箇所を読むとき、申命記8章4節の「**この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。**」を同時に思い出します。40年の荒れ野の旅で、彼らの着ている着物はおそらくボロボロになり、履物もなくなってしまった足は傷だらけであったことでしょう。しかし、そのような状況の中にあっても、主なる神は御言葉によって、契約の民イスラエルの人々の衣食住のすべてを40年の間備えてくださったと、申命記の著者は語っています。これらの申命記の御言葉を背景にして本日の箇所を読み進めるとき、主イエス・キリストが受けられた誘惑の出来事一つ一つが、実は私たち一人一人の現実をしっかりと見つめて語られていることに気づかされます。

5節から6節に記されている「世界のすべての国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。」という誘惑は、まさに現代の世界の国々の指導者たちが望んでいるものと言えるでしょう。そして、それはまた、私たちにも当てはまることと言えます。自分自身の思い通りに何事でもできると私たちが考えるとき、そこには、私たちを愛し導き支えてくださる神様の存在が見えなくなってしまうのではないのでしょうか。だからこそ、主なる神様に完全の信頼を寄せておられる主イエスは、8節に記されているように「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」という申命記6章13節の御言葉によって悪魔に対峙されたのです。この御言葉は、今日の私たちにとってもいつも心に刻んでおきたいものです。

3つ目の誘惑は、9節から11節に記されている「主を試す」というものです。本当に主なる神様がおられ私を守り導いて下さっているのか、神様を信頼して本当に大丈夫なのかということ、試して確かめようとする事です。そして、自分自身で確信が持てたら、安心することができたら、歩み出すことにしようとする事です。悪魔は詩編91篇11節から12節を引用します。詩編91篇は、本来は確かな守りを与えてくださる神への信頼を呼びかける歌ですが、悪魔はそれを主イエスご自身が自分のために使うように誘惑するのです。私たちは、しばしば「もし神様が私をいつも守って下さっているのなら、その証拠を見せてください」というような祈りをしがちです。あるいは、「神様がおられるのなら、なぜ、このような苦しいことが私にばかり降りかかるのか」と考えることも、主なる神様を試していることになるかもしれません。しかし、最後に主イエスは「あなたの神である主を試してはならない」という申命記6章16節の御言葉で、悪魔を離れさせます。

この箇所を読むときに、私はいつも、悪魔は本当によく聖書の言葉を知っているな、と感心します。わたしたちの人生も悪魔の出没する「荒れ野」だと言えるかもしれません。その中で、私たちもまた、いつも主イエスのお受けになった誘惑と同じような誘惑と闘いながら歩まなければなりません。その時にこそ、神の子である主イエスが示して下さった悪魔とのやり取りを思い出したいと思います。そして、一つでもよいから聖書の言葉をもって誘惑に立ち向かいたいと思えます。主イエスへの悪魔からの究極の誘惑は、あなたは神様から示された十字架という杯を飲むことができるか、ということでした。それはまた、私たち一人一人に対して、十字架につけられるようなまことの人を、自分自身の救い主・まことの神として、本当に信じて歩み続けることができるか、という大きな問いかけでもあります。

